

2019年4月号 財務諸表論 つぶ問

1問目

【問題】

企業会計基準適用指針第16号「リース取引に関する会計基準の適用指針」に基づいて、ファイナンス・リース取引の貸手の会計処理に関する次の【文章】の空欄(A)から(L)にあてはまる語句を答えなさい。

【文章】

1. 所有権移転外ファイナンス・リース取引の貸手が、「リース取引開始日に売上高と売上原価を計上する方法」を採用した場合、リース取引開始日に、(A)総額を(B)として計上し、同額を(C)として計上する。また、リース物件の(D)によって(E)を計上する。

当初の(B)と(E)の差額は利息相当額として扱われ、原則、(F)によって各期に配分される。このとき、割引率としては、(G)を用いる。この利息相当額のうち、翌期以降に対応する部分は毎期の決算において(H)として処理される。具体的には、リース取引を開始した期の決算において、翌期以降に係る利息相当額を、(I)を用いて(H)に繰り入れ、その後の会計期間においては、回収できた(A)に含まれる利息相当額を、(H)から(J)に振り替えることで配分していく。

2. 所有権移転ファイナンス・リース取引の貸手が、「リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法」を採用した場合、リース取引開始日に、リース物件の(D)により(K)を計上する。その後、回収した(A)を(B)として計上し、(A)中に含まれる利息相当額を除いた金額を、(K)から(E)に振り替える。なお、利息相当額の配分については、原則、(F)を用いる。

3. ファイナンス・リース取引の貸手が、「売上高を計上せずに利息相当額を各期へ配分する方法」を採用した場合、リース取引開始日に、リース物件の(D)により、所有権移転の有無に応じて(C)または(K)を計上する。その後、每期回収する(A)については、利息相当額と元本回収部分とに区分し、前者を(L)として処理するとともに、後者は(C)または(K)から減額していく。したがって、ファイナンス・リース取引の借手が行う売買処理と対称的な処理方法といえる。

【解答】

(A)	(B)	(C)	(D)
リース料	売上高	リース投資資産	現金購入価額
(E)	(F)	(G)	(H)
売上原価	利息法	貸手の計算利率	繰延リース利益
(I)	(J)	(K)	(L)
繰延リース利益繰入	繰延リース利益戻入益	リース債権	受取利息

【解説】

簿記論の「つぶ問」にて割賦販売の処理を出題したことから、ファイナンス・リース取引の貸手の処理方法についての穴埋め問題を出題しました。実際に仕訳処理の仕方が把握できていても、「〇〇の処理について説明しなさい」といった、文章で表現する問題になるとうまく説明できない、といった経験はありませんか？

このような場合、その「**説明できない部分**」に**自分の理解が行き届いていない**可能性があります（特に、暗記に頼ってしまっている場合には、この傾向が顕著です）。例えば、(C)の「リース投資資産」や(K)の「リース債権」が上手く区別できない場合には、それらが所有権移転の有無によって使い分けられている、という理解が十分でない可能性があります。あるいは(G)の「貸手の計算利率」を間違えてしまった場合（例えば、「追加借入金利率」としてしまったなど）には、割引率の選択に対する考え方や借手と貸手の立場の違いが十分に理解できていない可能性があります（貸手が自分の計算利率を知り得ない、ということは考えられませんから、貸手の計算利率を用いる以外に割引率選択の余地はない、ということです）。

このように、「**会計処理の仕方を自分の言葉で説明してみる**」ことは、単に計算問題を解くこと以上に**自身の弱点分析に有用なことがあります**ので、普段の学習時から心掛けてみましょう。

本問は穴埋め問題でしたが、これが全部自分の言葉で説明できるようになると、完璧ですね（暗唱するのではない、という点がポイントです！本問も暗記する意味はあまりありません）。もちろん、**具体的な仕訳処理とリンクさせておくことも必要**ですので、本誌の該当箇所も再度確認しておきましょう。